

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00662

研究課題名(和文) 民主的シティズンシップを育成する内容言語統合型ドイツ語教育のための教員養成・研修

研究課題名(英文) Teacher training and development for content and language integrated German language education to promote democratic citizenship

研究代表者

太田 達也 (Ohta, Tatsuya)

南山大学・外国語学部・教授

研究者番号：50317286

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は民主的シティズンシップを育成する内容言語統合型ドイツ語教育を担う教員の養成・研修はどのようにデザインされるべきかという問いを追求するものである。この問いを追求するため、民主的シティズンシップ育成および内容言語統合型の外国語授業に関する調査、日本の大学におけるドイツ語教員養成の実態調査、教師アイデンティティの発展に関する調査などを行った。一連の調査の結果、ドイツ語教員養成・研修においては、養成・研修参加者の個人特性を重視し、同僚との対話的交流を重視した社会文化モデルに基づく養成・研修と、国を超えたネットワークの構築が必要かつ有効であることが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外国語教育は、単なる外国語の巧みな使い手の育成にとどまらず、自文化を相対化し、他者を尊重する視点や態度、民主的シティズンシップを備えた人間を形成することにつながるべきである。本研究の独自性は、こうしたコンセプトに基づくドイツ語授業を担える教員をいかにして育てるか、という教員養成・研修の視点に軸足を置いている点にある。教員個人のアイデンティティを受け入れて尊重し、そこを出発点にドイツ語教員としての専門性を自律的に高めていくことができるよう導くにはどうしたらよいか。この問いを探る本研究は、現状のドイツ語教員養成・研修の質的向上・改善に直結するため、ドイツ語教育の刷新につながりうる意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This study aims to investigate the optimal approach to training and developing teachers in content and language integrated German language education geared towards fostering democratic citizenship. To address this question, we conducted a comprehensive examination that included surveys on foreign language classes aimed at promoting democratic citizenship and integrating content and language, an assessment of the current landscape of German teacher training programs at Japanese universities, and an exploration of teacher identity development. Our findings underscore the importance of adopting a sociocultural model for the training program that prioritizes the unique strengths of each teacher and encourages interactive engagement among colleagues, along with establishing networks that reach beyond borders.

研究分野：ドイツ語教育、外国語教育学、応用言語学、第二言語習得研究、外国語教師養成・研修

キーワード：ドイツ語教育 教員養成・教師教育 民主的シティズンシップ 内容言語統合型学習 (CLIL)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本のドイツ語教育では、言語コミュニケーション能力を身につけさせることでどのような人を育成したいのかという「大きな目標」に関する議論はほとんどなされてこなかった。国際的な教育論に鑑みるならば、外国語教育は、単なる外国語の巧みな使い手の育成にとどまらず、自文化を相対化し、他者を尊重する視点や態度、民主的シティズンシップを備えた人間を形成すること、平和的共生社会の構築に貢献できる人を育てることにつながるべきものと考えられる。
- (2) 言語教育を通して民主的シティズンシップの育成をも目指すならば、初級段階から社会文化的内容のテーマを扱う授業方法も有効だと考えられる。実際にそれを支持する実証研究も存在する。では、このようなコンセプトに基づいた内容言語統合型のドイツ語授業を実践できる教員を養成・研修するにはどうしたらよいか。本研究はこの問いを追求するものである。
- (3) 言語教育の枠組みの中で主体的に社会と関わる市民を育成するという授業実践は、日本語教育の分野ではすでに行われている。日本でも学習初期の段階から同様のコンセプトで効果的にドイツ語授業を実践している事例はごくわずかに存在するが、認知度はまだ低い。日本でこうした新しい方向性のドイツ語教育を広く実現するには、それを実践できるような教員の養成・研修のあり方を検討し、具体的提言を行うことがひとつの有効な方法となり得るだろう。
- (4) 教員養成・研修は、現在では「省察モデル」およびその延長線上にある「社会文化モデル」が国際的には主流である。近年の研究ではさらに、教師の「アイデンティティと役割」の問題を扱うことの重要性が指摘されている。日本のドイツ語教師の多くが外国語教育の研修を受けたことがないまま教壇に立っているという特殊な現状に鑑みると、この側面はきわめて重要な鍵となると考えられる。本研究はこうした観点に立脚し、教員の専門性とドイツ語教員としての役割の間の葛藤の克服と統合のプロセスを観察・分析する。

2. 研究の目的

- (1) 本研究は、「民主的シティズンシップを育成する内容言語統合型ドイツ語教育を担う教員の養成および研修はどのようにデザインされるべきか」という問いを追求するものである。
- (2) 教員養成・研修における大きな問題のひとつに、養成・研修参加者の持つ経験知やビリーフと養成・研修で提示される知見との衝突から生じる葛藤・反発および自信の喪失がある。参加者の経験知やビリーフは、うまく導かれればあらたな「知」へと発展しうが、場合によっては逆に、自己防衛・抵抗・態度の硬化を招くこともある。研究ではこの点を考慮する必要がある。
- (3) 上記の目的を掲げた本研究では、以下の調査を実施した。
 - (a) 外国語教員養成・研修に関する研究の動向調査
 - (b) 言語教育の枠組みにおける民主的シティズンシップ育成の実践に関する調査
 - (c) 行動中心・内容言語統合型の外国語授業の実践に関する調査
 - (d) 民主的シティズンシップ育成を念頭に置いたドイツ語授業実践に関する調査
 - (e) 日本の大学におけるドイツ語教員養成の実態調査
 - (f) ドイツ語教員養成・研修講座参加者の教師アイデンティティの発展に関する調査
 - (g) 次世代のドイツ語教員・ドイツ語教育研究者養成のための国際的ネットワークの構築

3. 研究の方法

- (1) 課題 (a) については、過去 15 年間に刊行された国内外の文献、特にドイツ語で出版されたものを中心に最新の研究動向を分析した。
- (2) 課題 (b) については、日本語教育の授業で民主的シティズンシップ育成を実践している研究者へのインタビューを行った。
- (3) 課題 (c) については、初級段階から内容言語統合型のドイツ語授業を実践している大学を訪問し、授業見学および教員インタビューを行った。
- (4) 課題 (d) については、代表者が自ら民主的シティズンシップ育成を念頭に置いたドイツ語授業を実践し、学習者のインターアクションの様子と事後インタビューを録画・録音するとともに、学習者を対象としたアンケート調査を実施した。
- (5) 課題 (e) については、大学における教職課程設置科目「ドイツ語科指導法」等の担当者を対象とした全国的アンケート調査を実施した。
- (6) 課題 (f) については、ドイツ語教員養成・研修講座参加者を対象にインタビューを実施した。
- (7) 課題 (g) については、台湾・韓国・中国・ドイツのドイツ語教育研究者と連携し、具体的方策について実務レベルの協議を行った。
- (8) 課題 (b) から (f) については、上記の方法でデータを収集したうえで、インタビューについては録音データからトランスクリプションを作成し、質的分析を行った。また、アンケートの自由記述回答については質的に、それ以外の項目については量的に分析した。

4. 研究成果

(1) 各調査の概要と結果

(a) 外国語教員養成・研修に関する研究の動向調査

近年の外国語教育研究では、外国語教育において言語・コミュニケーション能力や異文化間能力のみならず、問題解決能力、批判的思考能力、社会的能力、協働的能力、責任感、デジタル能力、民主的市民性なども育成されるべきであるという議論が国際的スタンダードとなっており、教師の養成・研修もその文脈で議論されている。

ドイツ語教育研究においては、1990年代のソーシャル・ターン以降、特に授業における学習者や教師のインターアクションを社会文化理論の立場から分析することに関心が向けられるようになり、それとともに研究対象としての教師への関心も高まってきた。とりわけ教師の主観的理論やビリーフの問題、探究的学習とリフレクション能力の育成、教師アイデンティティの発展および同僚との意見交換については多くの実証研究の結果が報告され、教師の専門性や教師養成・教師研修をテーマとした研究が盛んに行われるようになってきている。養成・研修参加者に焦点をあてた研究の主な関心は、外国語教師の専門的スキルがどのように開発されるのかという問題である。外国語教師の専門性を促進するためには、教授能力や言語・文化に関する知識だけでなく、協働や同僚との交流、アイデンティティの発達が不可欠とされている。また、リフレクション能力や協働能力、アクションリサーチ能力の重要性も指摘されている。

(b) 言語教育の枠組みにおける民主的シティズンシップ育成の実践に関する調査

ドイツの大学において日本語教育の枠組みで民主的シティズンシップ育成を実践している日本語教育研究者A氏を対象に、インタビューを行った。民主的シティズンシップの育成を目指すには、教師が答えを持っているわけではないというスタンスをはっきりと示し、対等に発言しあえるコミュニティを形成すること、その中から「自然に対話が生まれていく」ような土壌を作ることが重要だとA氏は語る。またA氏は、学生たちを信頼し、自身が協働的に問題解決に取り組むことを重視しているという。例えばグループワークにおいて誰かがついてこれない状況が生じて、他のメンバーがサポートして問題を解決することに任せ、教師はなるべく介入しない。また授業内の使用言語については、目標言語以外の言語で行った方が思考を深めることができると思われる場面では、その他の言語の使用を認めているという。民主的シティズンシップときくとまずは政治的・社会的な問題のディスカッションを思い浮かべ、中級以上でないといけないのではないかと考えがちだが、A氏の話からは、授業内での対等な関係性を構築するところからすでに民主的シティズンシップの促進は始まっており、初級レベルにおいても実践可能であるということであらためて認識させられた。また、授業内での使用言語を目標言語に限定しないという方針は、昨今話題のトランスランゲージングや複言語主義にも通ずる考え方であると言える。

(c) 行動中心・内容言語統合型の外国語授業の実践に関する調査

初級段階から内容言語統合型のドイツ語授業を実践している大学で授業を見学するとともに、担当教員B氏にインタビューを行った。B氏は当初、タスクベース・行動中心型の授業の実践経験がなく、理論的な本を読んでも長いこと自信が持てなかったが、自らの授業のビデオ録画を同僚とともに振り返る活動を通してはじめて自信がつくようになった、ただしそれまでに3～4年かかったという。B氏の授業では、文法は学習者が自ら望むまで提示も説明もしない。授業で最も重視しているのは、教師が「教える」のではなく、学習者自身が「学ぶ」のであり、学習者が自分たちで授業を作るという意識を持たせることである、という。そのために定期的に振り返りシートを書かせ、学びに対する意識を深めることに重きを置いているという。プレゼンテーションや質疑応答では、ドイツ語学習を始めて間もないにもかかわらず、補償ストラテジー等を駆使してドイツ語で意思疎通を試みていた。授業見学において特に印象的であったのは、学生がきわめて自主的に動き、主体的に学習に取り組む様子である。授業内ではグループ分けの方法を学生自身に時間をかけて考えさせるなど、一見ドイツ語に関係ないことに時間を割いているようだが、結局はドイツ語の自律的な学習に繋がっている。行動中心・内容言語統合型の授業を初級段階から導入するにあたっては、学びに対する意識を促進することが最重要ポイントだと言える。

(d) 民主的シティズンシップ育成を念頭に置いたドイツ語授業実践に関する調査

代表者は2023年度に自ら民主的シティズンシップ育成を念頭に置いたタスク・行動中心型のドイツ語授業を実践し、学習者のインターアクションおよび事後インタビューを録画・録音するとともに、参加者を対象にアンケート調査を行った。この授業では文法説明・文法練習や特定の場面を想定した会話練習などは一切行わず、グループ内の議論から質問に至るまで一貫してドイツ語のみを使用することとし、学習者はグループまたはペアで毎回、答えのない課題に取り組んだ。答えのない課題とは例えば、写真の解釈である。ここで大切なのは、単に写真を描写することではなく、「(自分には)何が見えるか」「どうしてそれが〇〇だとわかるのか/思うのか」について意見交換することである。これにより、自身の認識についてのリフレクションが促される。そうした協働学習プロセスの中で、言語が不正確でもよいから積極的に目標言語を使用することで、徐々にアウトプットに対する抵抗をなくし、言語運用に対する積極的態度を育てるとと

もに、自分の見方と他者の見方は異なるものだと気づかせることが、この授業の狙いである。

授業ではまた、「ぶっつけ本番」でドイツ語による対話をさせ、その様子をすべて自分たちで録画するよう促した。その後、発話内容を、間違いも含めて、すべてそのまま文字起こしさせたうえで、自分たちの対話のどこに問題があったか、どうすればよかったか、をふり返ってもらった。学習者たちは、話すべきテーマは与えられているものの、相手が何を言うてくるかはわからないという状況で対話にのぞみ、相手が言っていることがわからなければどうにかしてそれを伝え、逆に相手が自分の言うことを理解できなければどうにかして問題解決を試みる。テーマとしては例えば「何のために外国語を学ぶのか」といったものがあった。

授業後のアンケートでは、無意識のうちにステレオタイプの考えにとらわれていることや、人にはそれぞれ違った意見があることへの気づきなどが記され、本授業が民主的シティズンシップの育成にも貢献するものであったことが示された。ただし一部の学生にとっては言語面の負荷が少なくないことも明らかとなったため、運営にはさらなる改善が必要である。

(e) 日本の大学におけるドイツ語教員養成の実態調査

代表者は2022年6月から8月にかけて全国の「ドイツ語科指導演」科目の担当者を対象にオンラインでアンケート調査を実施した。目的は、日本の大学におけるドイツ語教員養成の現状、および「ドイツ語科指導演」科目担当者がドイツ語教員養成についてどのような考えを持っているかを把握するためである。調査の結果から主に以下のことが明らかになった。ドイツ語科指導演科目の内容は、科学知を実践知よりも重視する「応用科学モデル」に基づいたものと、文法知識やドイツ語力の訓練に重きを置いたものが大半を占め、リフレクション能力の発展に重きを置く「省察モデル」による教員養成はほとんど実践されていない。また、教授法や方法論など教育に関する理論的・実践的知識を教えることに重点を置く教員と、ドイツ語文法やその説明力などドイツ語能力の育成に重きを置く教員に大きく分かれる傾向が見られた。本アンケートでは回答者の母語を問う質問は設けていなかったため、各回答者が日本語母語話者であるかドイツ語母語話者であるかは不明だが、教授法・方法論など理論的知識や実践的知識を扱うことに重点を置く傾向は、ドイツ語での回答に顕著に多く見られた。また、模擬授業については多くの大学で実施されていることがわかった。一方、汎用的な資質・能力の育成というテーマを扱っていることを示唆する回答は少なかった。本調査の結果概要は、日独二言語でWeb上にて公開した。

本研究アンケートでは、近年の教育論の動向や新学習指導要領の求める学びと日本の実情との間に大きな乖離があることが明らかになった。また同科目は学内での関心度が低いことや、将来大学でドイツ語を教える職に就くことを志望する学生も少なからず参加していることも示された。このことを考えると、なかなか注力されない傾向にあるドイツ語科指導演科目を、逆にドイツ語教育変革の発信の場として活かすという発想もあり得るだろう。もうあと数年もすれば、新学習指導要領で学んだ高校生たちが大学に入学してくる。中高教育の骨格を成す資質・能力論や汎用的コンピテンシー等について、教師自身がしっかり学び、同じ大学の同僚や他大学の教師たちと情報交換することは、大学のドイツ語教育の変革にもつながるのではないのか。その意味で「高大連携」の意義が今まさに発揮されるチャンスだと言える。

(f) ドイツ語教員養成・研修講座参加者の教師アイデンティティの発展に関する調査

日本で唯一の体系的なドイツ語教員養成・研修である日本独文学会「ドイツ語教員養成・研修講座」の元受講生3名を対象に、オンラインでの半構造化インタビューを実施し、講座参加がアイデンティティの形成・変容にどのような影響をもたらしたのかを調査した。3名はいずれも大学で専任教員としてドイツ語を教えている研究者である。その結果、研究者でありドイツ語教師であるという二重のアイデンティティに基づく葛藤の有無とその度合いは専門や人によりさまざまだが、教育と研究の接点を見出すことでアイデンティティを調整し葛藤の解消を試みたり、職業的モチベーションの維持・向上を意識的に行ったりしていること、講座中のリフレクションの機会と講座参加後の授業実践が自身のビリーフの相対化や「あとからの気づき」につながっていることなどが明らかになった。

教員養成・研修にあたって参加者個人の個性、能力、経歴を出発点とすることがいかに重要であるかが、今回の調査であらためて明らかになった。教員養成・研修においては参加者自らの抱える問題を出発点とすべきであり、そのことを運営側は決して忘れてはならないし、参加者とも意識を共有する必要がある。また、自らの「強み」を認識させることで自己肯定感を高める、という活動の効果を過小評価してはならない。「足りていないこと」よりも「強み」に焦点を当てることで成長を促し、アイデンティティの形成を導くという方向性を、講師間で共有する必要がある。加えて、教員養成・研修においては、参加者たちをあらかじめ決められた特定のビリーフに導くべきではないことであらためて気づかされた。例えば講座参加後に参加者がコミュニケーション・アプローチを実践するとしたら、「それがよいと講座で教えられたから」という理由であるべきではない。教員養成・研修において、特定の教授法を強く推奨するかのような印象を与えないこと、「こうするのが正しい」と示さないことはきわめて重要である。仮に「運用能力を育てるには文法規則の明示的知識を与えることが重要だ」というビリーフを持っている教員に対し、「明示的知識の教授が運用能力にそのままつながるわけではない」という科学的知見を提示したとしても、その行動はすぐには変容しないだろう。それよりも、なぜそう思うのか、実際

にそのように教えることでどのような効果が見られたか、それについて自身はどう思うか、といった一連のリフレクションによって、自らが納得する「答え」に導くという姿勢を忘れてはならない。また、教員養成・研修では参加者に寄り添いつつ、彼らがそれぞれ「自分たちの置かれた状況において何をするか」を自分で考えるように導かねばならない。自分がどのような教師であり、ということが得意であり、与えられたコンテキストにおいて自分はどのようにしたいと思うか、などについてよく考えるための機会を与えることが重要である。参加者は何かを習得するために「頑張らなければいけない」のではなく、むしろ「無理することなく」自分には何ができるかを考える方向に導くことが重要であることが、調査から明らかになった。

以上の結果から、教員養成・研修にあたっては、「参加者中心」（参加者の置かれた環境や抱える問題を出発点とし、自分はどうしたいかを考える活動を中心に据える）、「結果に対しオープンであること」（参加者を特定の方向にではなくリフレクションへと導く）、「個人特性の重視」（参加者の個性や経歴を考慮し、ありのまま受け入れる）が重要であるとの帰結が導き出された。

この調査と別に、分担者はドイツ語教育に従事し始めたばかりの教員へのインタビューを定期的にを行った。これら一連の研究の結果は、国際学術誌にドイツ語で刊行している。

(g) 次世代のドイツ語教員・ドイツ語教育研究者養成のための国際的ネットワークの構築

2023年度の特筆すべき活動としては、中国および台湾においてドイツ語教育研究者との国際共同ネットワーク構築に関連するシンポジウムに登壇し、国際連携強化に向けて東アジアの研究者たちと協議を進めることができた点が挙げられる。

ここ数十年、世界の多くの国でドイツ語学習者の数が大幅に減少している。日本のみならず韓国などの東アジア諸国でも同様で、学部再編に伴ってドイツ語系学科が廃止される例もあり、その結果、ドイツ語教員養成課程およびドイツ語教育研究者養成機関も減少している。その一方で、2010年代にはドイツ学やドイツ語教育の学位プログラムにおける国際協力が顕著に強化され、国際的なネットワークの構築に関する積極的な報告も多く見られるようになった。東アジア地区には、ドイツ語教育研究に関心を持つ熱心な研究者や学生はいるものの、体系的な養成・研究プログラムは少ないという実情がある。しかし新しいデジタル技術を利用することで、国境を越えた大学間の国際的協力体制を確立し、学生に交流の機会を提供することができる。こうした発想に基づき、アジア諸国の若手ドイツ語教員志望者・ドイツ語教育研究者を対象とした国際連携オンライン・ワークショップ・プロジェクトを構想し、2024年春に実現させた。

(2) 総括

一連の研究の結果、民主的シティズンシップの育成の場としての言語教育という広い視点を持ちつつ、内容言語統合型を始めとする新しいコンセプトに基づく授業を実践できるプロフェッショナルリティを備えたドイツ語教員を育成するにあたっては、養成・研修参加者の個人特性を重視し、彼らの抱える問題を出発点としたうえで、同僚との対話的交流を重視した社会文化モデルに基づく養成・研修と国を超えたネットワークの構築が必要かつ有効であることが確認された。研究者としてのアイデンティティと、ドイツ語教員としてのアイデンティティという二面性を自分の中でどのように捉えて折り合いをつけるのかについて自ら省察することで、研究者でありながら教師として働くことの意義と自らの役割およびモチベーションについてメタ的に再考する機会を持たせることが、日本のドイツ語教員養成・教員研修では特に重要であると考えられる。長期的な視点に立った教員のキャリア形成やアイデンティティの問題はまだ解決すべき課題が多いため、この面での研究をさらに深化させていくことが今後の課題となる。

これからの外国語教育は、言語能力の向上だけでなく、批判的思考能力、問題解決能力、協働能力、情報リテラシー、民主的市民性などの汎用的なコンピテンシーの育成を視野に入れた教育を立案し、実践していくことが求められている。したがってこれからのドイツ語教師には、そうした教育を実践できる能力が必要になる。教授法的観点からすれば、個人の能力だけでなく他者や社会とのつながりを意識した教育方法、例えば社会文化的なテーマについて意見交換したり、目標言語を使って協働で問題解決を試みたりするような「対話的な学び」を核とした授業設計がますます重要になるだろう。そうした外国語教育および教育全般に関する最新の動向について知っておくことは、教師として自分に求められている役割を知ることにもなり、また自らの授業のブラッシュアップにもつながる。その意味で、教師はつねに最新の動向にアンテナを張り、情報を更新し、自己研鑽していけるような資質と能力が求められるだろう。また、教育の方向性が大きく転換している中、ドイツ語教師にはこれまで以上にリフレクション能力、アクションリサーチ能力が求められる。新しい教育を試みるには、自らの授業実践を批判的に振り返り、改善につなげていく自律的な能力が欠かせない。特に日本のようにドイツ語教師養成・教師研修の機会がほとんどない状況においては、各自がリフレクション能力を身につけ、教師としての専門性を高めていくことが必要である。こうした教師の成長や発展は、ひとりではできないものではない。鍵となるのは、研修はもちろん、同僚たちとの情報交換や授業参観の機会だろう。ゆえに国内外の人的ネットワークを構築し有効に活用していくこともまた、これからのドイツ語教師には必要な力だと言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 10件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Tatsuya Ohta, Akira Kusamoto, Elvira Bachmaier | 4. 巻 1 (1) |
| 2. 論文標題 Identitaetsentwicklung als Professionalisierung von DaF-Lehrenden | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 KONTEXTE | 6. 最初と最後の頁 241-256 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24403/jp.1297038 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |
| 1. 著者名 Julia Feike, Vera Janikova, Tatsuya Ohta, Kristina Peuschel, Constanze Saunders, Michael Schart | 4. 巻 1 (1) |
| 2. 論文標題 Professionalisierung erleben, gestalten, begleiten und erforschen: Einleitung zur ersten Ausgabe von KONTEXTE | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 KONTEXTE | 6. 最初と最後の頁 1-20 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24403/jp.1296775 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |
| 1. 著者名 太田達也 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 職業的アイデンティティの発達を支援するドイツ語教員養成・研修 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 慶應義塾大学日吉紀要 ドイツ語学・文学 | 6. 最初と最後の頁 49-65 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |
| 1. 著者名 太田達也 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 市民性形成を視野に入れたドイツ語教育 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ文学研究 | 6. 最初と最後の頁 55-59 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 太田達也 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 これからのドイツ語教師に求められる能力 教職課程ドイツ語科指導法科目の現状と課題 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ語教育 | 6. 最初と最後の頁 80-97 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Tatsuya Ohta | 4. 巻 50 (6) |
| 2. 論文標題 Tendenzen im Fach DaF in den 2010er Jahren - im Lichte der Entwicklung der Forschung zur Aus- und Fortbildung von DaF-Lehrkräften im Ausland | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Informationen Deutsch als Fremdsprache | 6. 最初と最後の頁 664-677 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/infodaf-2023-0076 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 太田達也 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 ドイツ語授業における文法の扱い 第二言語習得研究および外国語教育論の視点から | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ語教育 | 6. 最初と最後の頁 8-13 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Akira Kusamoto | 4. 巻 58 |
| 2. 論文標題 Handlungsorientierte Aufgaben auf Anfaengerniveau | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 LeRuBri | 6. 最初と最後の頁 16-18 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 草本晶 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 文法の学び方をリセットする コンセプトと実践 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 ドイツ語教育 | 6. 最初と最後の頁 27-32 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Hebataallah Fathy, Dietmar Roesler, Camilla Badstuebner-Kizik, Tatsuya Ohta, Alla Paslawska, Gesine Lenore Schiewer | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 Germanistik und Deutschlehrer*innenausbildung weltweit. Schnittstellen, Kooperationsformate und das Potenzial von digitalen Elementen. | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Boeckmann, Klaus-Boerge et al. (eds.): IDT 2022. Band 1: Mit Sprache handeln. Partizipativ Deutsch lernen und lehren. | 6. 最初と最後の頁 369-381 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 該当する |

〔学会発表〕 計14件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 8件)

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 太田達也、鈴木友美加 |
| 2. 発表標題 DaFをめぐる誤解とDaF研究の近年の動向 |
| 3. 学会等名 日本独文学会東海支部2022年夏季研究発表会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hebataallah Fathy, Dietmar Roesler, Camilla Badstuebner-Kizik, Tatsuya Ohta, Alla Paslawska, Gesine Lenore Schiewer |
| 2. 発表標題 Podium Plus: Germanistik und Deutschlehrer*innenausbildung weltweit. Schnittstellen, Kooperationsformate und das Potential von digitalen Elementen (DAAD) |
| 3. 学会等名 17. Internationale Tagung der Deutschlehrerinnen und Deutschlehrer (IDT) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田達也 |
| 2. 発表標題 これからのドイツ語教師に求められるもの 教職課程ドイツ語科指導法科目の現状と課題 |
| 3. 学会等名 Goethe-Institut主催専門家会議「ドイツ語教育の未来を拓く 持続可能なドイツ語教育に向けて」(招待講演) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuan Li, Tatsuya Ohta, Christian Horn |
| 2. 発表標題 Podiumsdiskussion: Vernetzung der Deutschlehrenden - die Lage der Deutschlehrerausbildung im Land und die Moeglichkeit der Netzworkebildung im Land/ in der Region |
| 3. 学会等名 GETVIC024 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Welche Kompetenzen werden von DaF-Lehrenden an Hochschulen ausserhalb des deutschsprachigen Raums heute und in Zukunft erwartet? |
| 3. 学会等名 GETVIC024 (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Deutschlehrendenaus- und -fortbildung in Japan und Potenziale der Kooperation mit Nachbarlaendern |
| 3. 学会等名 Internationalization of teacher education for German as Foreign/Second Language (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Fortbildungskurs fuer Deutschlehrende als berufliche Identitaetsentwicklung - wie die Teilnehmenden ein auf Subjektivitaet ausgerichtetes Fortbildungskonzept wahrnehmen |
| 3. 学会等名 14. Kongress der Internationalen Vereinigung fuer Germanistik (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Buergerbildung im Deutschunterricht an einer japanischen Universitaet |
| 3. 学会等名 GETVIC024 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 太田達也 |
| 2. 発表標題 ドイツ語授業における文法の扱い 第二言語習得研究および外国語教育論の視点から |
| 3. 学会等名 日本独文学会ドイツ語教育部会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Oliver Bayerlein, Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Google war gestern: Was die KI fuer Lehrkraefte tun kann |
| 3. 学会等名 日本独文学会東海支部 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Tatsuya Ohta |
| 2. 発表標題 Anforderungen an DaF in Ostasien und Konsequenzen fuer die Lehrkraefte-Ausbildung |
| 3. 学会等名 DaF-Vernetzungstreffen 2023 (Goethe-Institut China) (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Olga Czyzak, Julia Feike, Mi-Young Lee, Tatsuya Ohta, Marco Raindl |
| 2. 発表標題 Break-Out-Sessions als interaktionale (Frei-)Raeume fuer Lernende im DaF-Unterricht |
| 3. 学会等名 4. Online-Tagung von Interaktion in DaFZ: Wechselwirkungen zwischen Unterricht und Lebenswelt (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Akira Kusamoto, Tatsuya Ohta, Marco Raindl |
| 2. 発表標題 Anforderungen und Potenziale eines multilateralen Masterstudiengangs aus der japanischen Perspektive |
| 3. 学会等名 Internationalisierung der Lehrerbildung fuer Deutsch als Fremdsprache in Ostasien 2023 (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 草本晶 |
| 2. 発表標題 文法の学び方をリセットする コンセプトと実践 |
| 3. 学会等名 日本独文学会ドイツ語教育部会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Tatsuya Ohta et al.; Goethe-Institut Tokyo (ed.) | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 iudicium | 5. 総ページ数 176 |
| 3. 書名 What are the benefits of learning multiple languages? International Symposium on Foreign Language Teaching and Learning Research. 多言語教育の意義とは？外国語教育・学習研究に関する国際シンポジウム | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

| |
|--|
| 太田達也（編）（編集協力：鈴木友美加）：『日本の大学における独語科指導法科目に関するアンケート結果』を2024年1月23日付で公開した（下記URL > Daten > Projekt Ohta 2024）。 https://www.gw.uni-jena.de/fakultaet/institut-fuer-deutsch-als-fremd-und-zweitsprache-und-interkulturelle-studien/institut/bereich-deutsch-als-fremd-und-zweitsprache/arbeitsbereiche-forschung/fluss-forschungsstelle-fuer-lehrendenprofessionalisierung-unterrichts-und-schulentwicklung-in-deutsch-als-fremdsprache-weltweit/berufliche-identitaetsentwicklung-von-daf-lehrkraefte-in-japan |
|--|

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 草本 晶 (Kusamoto Akira) (60337722) | 麗澤大学・外国語学部・教授 (32506) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|